

令和六年度
入学試験問題
国語

受験上の注意

- 一、監督の指示があるまで問題用紙を開かないこと。
- 二、解答はすべて解答欄に記入すること。
- 三、時間は四十五分です。

横浜学園高等学校

問題一 次の傍線部の漢字の読みをひらがなで、カタカナを漢字で答えなさい。

- ① 破竹の勢いで勝ち進んだ。
- ② 運動会で行進の旗手を務めた。
- ③ 状況を客観的に判断する。
- ④ 事前に危険を察知する。
- ⑤ 旅の一部始終を話した。
- ⑥ 彼の一言が、ケンアクな空気を変えた。
- ⑦ 円柱のタイセキを求める。
- ⑧ 選手が一列にセイゼンと並ぶ。
- ⑨ 生徒会役員選挙にリッコウホする。
- ⑩ 手紙をソクタツで送った。

問題二 次の文章Iを読み、後の問いに答えなさい。

文章I

私が高校生の頃の父は、とにかく寡黙かもくな人だった。同僚との付き合いもさしてないようで、まっすぐに帰宅し、母が遅番のときには食事の準備をして、私にはさきに食事をさせ、自分は母の帰宅を待って、食卓で静かに読書①おくらてんしんをしていた。

父の蔵書は（A）多くなく、繰り返し読んでいる本があった。②岡倉天心の『茶の本』。この文庫本を、繰り返し繰り返し、読んでいた。

ページは赤茶けていて、あちこちにしみがあり、手垢てあかにまみれていた。汚い本だなあ、というのが最初の印象。そして、漢字がいっぱいあって、難しそう。一見して「茶の湯」に関する内容のようだった。美術と国語が得意だった私は、ためしに読んでみることにした。

——おのれに存する偉大なるものの小を感じるのできない人は、他人に存する小なるものの偉大を見のがしがちである。——

それは、西洋人に日本の美の真理を教えるための美学書であり、哲学書だった。(B) 難しかったが、その難しさに逆らって、私は必死に読み進めた。そこには、^{＊げんぜん} 厳然とした、日本人の茶の論理があった。圧倒的な美意識があった。はっきりとはわからないものの、私は、この本の中に語られている伝統的な「美」に対して、もやもやとした興味を覚えた。そして、強い反発も^③。

この本の中で語られていることは、この筆者が生きていた時代には、確かに真実だったかもしれない。ただ、美意識についていうのは、時代によって変わっていくものなんじゃないか。

十八歳だった私は、生意気にも、そんなことを考えたのだった。そして、都内の美術史教育で知られる私立大学で勉強しようと思いついた。それも、とびきり新しい、自分たちの時代の芸術について学ぼうと。

父の文庫本を読んだことは、父にも母にも言わなかった。

その後、私は、猛然と受験勉強をし、難関校だったその大学の文学部に入学を果たした。

母は手放しで喜んで、どうにか進学できるよう、段取りしてくれた。父は、(C) 言葉少なに、おめでとう、と告げ、どこか照れくさそうに微笑んでいた。

大学生になり、(D) 社会人になってから、私の父に対する印象は、ほんの少し変わった。^⑤

父は、「無能の人」などではない。けれど、母にとっては——そして社会にとっては、「無用の人」なのかもしれないと。

自立を果たした私にとっても、父は、そういう人なのかもしれないなかった。

(原田マハ「無用の人」(『あなたは、誰かの大切な人』所収)より)

※問題作成の都合上、本文の一部を割愛した。

【語注】

* 岡倉天心……美術評論家。横浜に生まれる。東京美術学校(現在の東京芸術大学)の創設につとめた。

* 厳然……重々しく近寄りにくいさま。

問一 本文中の空欄（A）～（D）にあてはまる語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度使ってはならない。

ア やはり イ さして ウ さらに エ もちろん

問二 —部①「岡倉天心の『茶の本』」の内容を説明している部分を本文中から二十八字で抜き出して答えなさい。

問三 —部②「この文庫本を、繰り返し繰り返し、読んでいた」ことがわかる部分を本文中から三十一字で抜き出して答えなさい。

問四 —部③「強い反発も」の後に省略されている語を本文中から三字で抜き出して答えなさい。

問五 —部④「そんなこと」が指す内容を本文中から一続きの二文で抜き出し、最初と最後の五字をそれぞれ答えなさい。

問六 —部⑤「私の父に対する印象は、ほんの少し変わった」とあるが、どのような「印象」へと変わったか。本文中から一続きの二文で抜き出し、最初と最後の五字をそれぞれ答えなさい。

問七 本文の内容と合っているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 岡倉天心の『茶の本』は、「私」にとって難しすぎたため、読み進められなかった。
- イ 芸術について学びたかった「私」は猛勉強の末に、難関大学の文学部に入学を果たした。
- ウ 「私」の父の趣味は本の収集で、死ぬまでに読み切れないほど多くの本を持っていた。
- エ 「私」の父は社交的な人で、同僚との付き合いが多く、自宅にはほとんどいなかった。

問題三 次の文章Ⅱを読み、後の問いに答えなさい。

文章Ⅱ

一九九一年夏に第一回のA C E Fスタディツアーが実施されてから、年に二回、春と夏に開催されてきました。途中、選挙時の治安悪化や世界的な感染症拡大のため中止になった回もありますが、二〇一九年夏のスタディツアーまでに参加した人数は、(X) 年間で延べ七八七名になります。

① 最初の頃のツアーに参加した方々は、未知の経験で勇気が必要だったことと想像します。当時のバン格拉デシユは独立後二〇年経っているとはいえ、日本での知名度は低く、国に関する書物や資料は書店にも図書館にも乏しい状態でした。もちろんインターネットはない時代です。在日バン格拉デシユ大使館に情報を求めて訪ねても、簡単な小さな地図を一枚くれただけでした。

参加者は、訪問する意味や参加意識を高めるため、前もってセミナーに参加し、また一泊二日の準備会で、バン格拉デシユの歴史、経済、政治、教育、宗教など、お互いに勉強して発表し合いました。一通りの勉強はしてから行っても、頭で知ると実際に見るのとは大違いで、現地で得るインパクトは強烈なものだったと思います。

回を重ねるごとに、準備会では前回参加者の経験談など生の声も聞き、質疑応答などが活発にされ、より良いスタディツアーへと発展していきました。意識をもって参加するのと、旅行気分に参加するのでは雲泥の差があります。バン格拉デシユで経験して得たものは、参加者一人ひとりの人生に影響を与えてきました。このスタディツアーが原点となり、国際協力の道に進んだ方は数知れずいます。

(A)、ひとくちに国際協力といっても、多様性があります。国際協力には対等な関係が必要であり、その対等な国際協力の始まりは、相手を知ることからです。(B)、バン格拉デシユのイメージを聞くと、貧困、洪水、不衛生など、マイナスイメージばかり出てきます。かわいそうな人々に何ができるだろうか、そんなひとりよがりの善意からスタディツアーに参加した方もいるでしょう。

ところが、現地で二週間生活する中で、「私たちには何もできない」ことがわかるのです。⑤ そればかりか、私たちは受けるばかりで、日本にいてはわからなかった「生きる力」を教えられ、たくさんの学びを得たという感想を多く聞きます。スタディツアー参加者の帰国後感想文の中からほんの一部を紹介します。

NKさん (会社員 一九九二年夏参加)

バン格拉デシユを訪れ、やはり、富める国と貧しい国との差は歴然としてあることを思い知らされた。(C)、富める国の側にいる後ろめたさも感じた。しかし、今、日常生活に戻って感じるのは、「私たち日本人は、物や情報などにとらわれ、余分なことに思いを費やし、本当に大切なものが見えなくなっているのではないか」ということだ。

貧しいことが良いこととは言えないが、日本は余りにも物質的なものを中心とする社会になり過ぎている。そして、生きることが安易にできる (ポーツ

としても生きられる)ため、自分の「いのち」さえ、見えなくなっている。

バン格拉デシュにおいて「生きていくこと」は、とてもしんどくてかなりパワーが要る。それだけに彼らは、生命の重さ、生きることとはどんなことか、身をもって知っているのではないだろうか。余分なものがないぶん、畏敬いけいの気持ち、感謝の気持ちと祈る心は、私たち以上に強いと思う。

(西村幹子・小野道子・井上儀子『SDGs時代の国際協力 アジアで共に学校をつくる』より)

※問題作成の都合上、本文の一部を割愛した。また、一部の表記を改めた。

【語注】

*ACEF……一九九〇年に設立された特定非営利活動法人アジアキリスト教教育基金(The Asia Christian Education Fund)。

*スタディツアー……非政府組織の活動の現場を訪れ、体験を通して現地を抱える課題などを考える旅行。

*バン格拉デシュ……インドの北東部にある国。首都はダッカ。

問一 本文中の空欄 (X) にあてはまる数字を算用数字で答えなさい。

問二 本文中の空欄 (A) (C) にあてはまる語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度使ってはならない。

ア また イ しかし ウ 例えば エ つまり

問三 部①「最初の頃々想像します」とあるが、その理由を「だったから」につながるように本文中から三十六字で抜き出して答えなさい。

問四 部②「前もって合いました」とあるが、それは何のためか。本文中から十七字で抜き出して答えなさい。

問五 部③「国際協力」に必要なものは何だと述べられているか。本文中から五字で抜き出して答えなさい。

問六 部④「ひとりよがりの善意」とは、どのような「善意」か。「という善意」につながるように本文中から十八字で抜き出して答えなさい。

問七

――部⑤「それ」が指す内容を「こと」につながるように本文中から十九字で抜き出して答えなさい。

問八

本文の内容と合っているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア スタディツアーが原点となって、多くの人が国際協力の道に進んだ。
- イ バングラデシュの人々は、自分たちの国が富める国になることを願っている。
- ウ 第一回のACEFスタディツアーは、一九九一年の春に開催された。
- エ 現地で受ける衝撃が強烈なため、セミナーなどの事前準備は意味がない。

問題四

次の文章は、**文章Ⅱ**に述べられている「国際協力のあるべき姿」について、**文章Ⅰ**にある「父の人物像」と「父の愛読書」の内容をふまえて考察したものである。空欄にあてはまる語を後の【語群】からそれぞれ選び、答えなさい。ただし、同じ語を二度使ってはならない。

私たちは、(A)に暮らしているという自負心を持ち、(B)の人々へのボランティア活動で、どこか上に立った物の見方やふるまいをしていないだろうか。自分たちは(C)国で生まれ育ち、高い学力を身につけたと思っても、時や場所を変えれば、その能力は時として実にちっぽけなものである。そのことに気づかずに、「私たち(A)が(B)をどう支援すればよいか」という視点でしか物事を考えることができなければ、国際協力ボランティアの場では、**文章Ⅰ**の言葉を借りれば、日本人が「(D)」となりかねない。

「おのれに存する偉大なるものの小を感じることのできない人は、他人に存する小なるものの偉大を見のがしがちである」(自分にある、一見すると偉大に思える能力や性質が、実はちっぽけなものだと気づけない者は、他人にある一見すると小さく見える能力や性質が実は偉大なものであることに気づけない。見逃してしまう。)という(E)の言葉にあるように、国際協力の場においてこそ、日本人が(B)の人々の「(F)」に気づけなければならない。

実際、**文章Ⅱ**にあるように、バン格拉デシュを訪れた日本人が、(B)の人々から「生きる力」を教えられ、たくさんの学びを得たという感想が多く聞かれるという。(B)の人々がひたむきに生きる、その力は偉大で尊いものであると気づけた時、(G)で共に力を合わせて創造していく、「SDGs時代の国際協力」の真の姿が生まれるのではないだろうか。

【語群】

- 島国 ・ 先進国 ・ 発展途上国 ・ 四季のある国 ・ 富める ・ 貧しい ・ 面白い ・ 涼しい ・ 無用の人
- 無気力の人 ・ 有用の人 ・ 有能の人 ・ 岡村天心 ・ 岡倉天心 ・ 原田マハ ・ 父親 ・ 娘 ・ 偉大なるものの小
- 偉大なるものの大 ・ 小なるものの小 ・ 小なるものの偉大 ・ 上下関係 ・ 主従関係 ・ 対等な関係 ・ 補助する関係
- 師弟関係

問題五

「おのれに存する偉大なるものの小を感じることでできない人は、他人に存する小なるものの偉大を見のがしがちである」は、岡倉天心が明治時代に日本の思想文化、特に美の真理を欧米に伝えるために書いたと言われる、美学書、哲学書である『茶の本』の一節の日本語訳である。岡倉天心によって英語で書かれた次の原典から、「他人に存する小なるものの偉大」を表す部分を問題四の文章中にある日本語訳も参考にして、英語七語で抜き出して答えなさい。

(原典)

Those who cannot feel the littleness of great things in themselves are apt to overlook the greatness of little things in others.

試験問題は以上です。

